

帆樫成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.55



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.55

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

- 特集1 館長バトンタッチインタビュー P.2~3
- 特集2 企画展「にいがたの中世」 P.4
- 歴史さんぽ 多賀春徳の墓碑 P.5
- おすすめの一冊 「築地ホテル館」物語 P.5
- 特集3 企画展「大河津分水・関屋分水と新潟市」 P.6
- 館長日記 萬代橋と新潟市 P.7
- 収蔵資料紹介 「新潟築港記念博覧会写真帖」 P.7



旧第四銀行住吉町支店での子どもイベント

■ 帆樫成林「はんしゅうせいりん」第55号
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■ 印刷／株式会社博進堂

各イベントは新型コロナウイルス感染症にともなう状況により中止または内容を変更する場合があります。

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
4/29(金)・30(土) 14:00~15:00	こいのぼりをつくろう	身近なものでこいのぼりをつくります。よく回る風車もつけて、こいのぼりを風の中で泳がせてみましょう。	どなたでも・申し込み不要・材料がなくなり次第終了・無料
5/3(水)・4(木) 14:00~15:00	みなとびあ敷地クイズラリー みなとびあ博士になろう	みなとびあ敷地内の建物にまつわるクイズに答えてみなとびあ博士になろう。	どなたでも・申し込み不要・無料

お申し込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申し込み締切日は、当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

「にいがたの中世」展

日本の歴史の中で平安時代末から戦国時代までを中世と呼びます。新潟県では、上杉謙信などの武士たちが華々しく活躍した時代として知られ、多くの人々の関心をひきつけています。新潟市内には、上杉謙信の書状などの古文書や、中世の城館や村から出土した考古資料が残っています。本展では、新潟県内所在の中世史料を軸として、新潟市および新潟県の中世の歴史をたどります。

会期 2022年4月16日(土)~5月29日(日)

(前期) 4月16日(土)~5月8日(日)

(後期) 5月10日(火)~5月29日(日)

休館日 毎週月曜日 ※5月2日(月)は開館

主催 新潟市歴史博物館・新潟日報社

後援 朝日新聞新潟総局、毎日新聞新潟支局、読売新聞新潟支局、日本経済新聞社新潟支局、産経新聞新潟支局、NHK新潟放送局、BSN新潟放送、NST新潟総合テレビ、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21、NCV(株)ニューメディア、FM新潟77.5、FM KENTO、ラジオチャット・エフエム新潟、エフエム角田山ほかほラジオ

観覧料 一般500円/大学・高校生300円/中・小学生200円(土日祝日は無料)
※常設展示観覧料を含む/20人以上は団体料金(2割引)

次回企画展

「大河津分水・関屋分水と新潟市」展

大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年にあたる今年、新潟市におけるその役割を、都市機能の整備や治水をめぐる歴史を通して紹介します。なお本展は、当館をはじめ、燕市分水良寛資料館、燕市長善館史料館、信濃川大河津資料館、長岡市立科学博物館、新潟県立歴史博物館の6館の連携によるリレー展として開催します。

会期 2022年7月17日(日)~8月28日(日)

休館日 毎週月曜日、7月19日(火) ※7月18日(月)は開館

みなとびあ便り

敷地にある旧新潟税関庁舎は、国の重要文化財に指定されています。歴史上価値のある建物として、日々の管理だけでなく非常時の備えもしています。

火災に対しては、消防訓練の実施や消火栓、放水銃の設置などがあります。その中で、放水銃は主に外部からの延焼を防ぐ目的を担っており、延焼防止に有効な場所に設置されています。そして、周囲の景観に馴染むような形や色となっています。消火栓や放水銃の使用に備えて貯水槽もあり、放水銃からは毎分約200ℓの放水が可能です。対角に配置された2つの放水銃で建物を広くカバーできるようになっています。

とは言え、この先ずっと、このような設備が使われることなくあって欲しいものです。
(企画普及課 渡辺絵奈)



みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



展示解説会

日時: 毎週日曜日 14時から30分程度
※申し込み不要、企画展観覧券が必要

関連イベント

記念講演会「鎌倉時代と越後の領主」

日時: 5月14日(土) 13時30分~15時 会場: 2階セミナー室
講師: 矢田俊文氏(新潟大学名誉教授)
※要申し込み、定員60名(応募者多数の場合は抽選)、受講料500円、5月6日(金)締め切り

ワークショップ「自分だけのかぶとをつくってみよう」

日時: 5月5日(木) 14時~15時 会場: 1階たいけんのひろば
※要申し込み、定員10名、応募者多数の場合は抽選、無料、4月29日(金)締め切り

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】10:00~11:30 【会場】本館2階セミナー室
【申し込み】要事前申し込み(定員60名程度) 【資料代】100円

◆4月の講座: 4月24日(日) ※申し込み開始: 4月6日
近世新潟町と火災 - 安政三年大火を中心に - 講師: 安宅俊介

◆5月の講座: 5月22日(日) ※申し込み開始: 5月4日
黒鳥伝説と緒立八幡宮古墳 講師: 小林隆幸

◆7月の講座: 7月24日(日) ※申し込み開始: 7月6日
絵画で旅する近世新潟 - 江戸時代の新潟を描いた作品を楽しむ - 講師: 大森慎子

◆8月の講座: 8月28日(日) ※申し込み開始: 8月10日
水防と湿田農耕 - ドンチ池を事例に - 講師: 山田祐紀

お知らせ

■ 2022年6月20日(月)~27日(月)まで薬剤燻蒸のため休館となります。

旧小澤家住宅企画展

- 【展示】
- 「新潟の引札」展 会期: 4月2日(土)~5月8日(日)
- 「五姓田芳柳」展 会期: 5月14日(土)~6月12日(日)
- 「そば猪口」展 会期: 6月18日(土)~7月10日(日)

開館時間: 午前9時30分~午後5時
休館日: 原則月曜日、祝日の翌日、年末年始
入館料: 一般200円 小学生100円(土・日・祝日は無料)
所在: 新潟市中央区上大河前通12番町2733 (みなとびあから約800m、徒歩12分)
TEL: 025-222-0300

編集後記

今回は館長交代に伴い、伊東前館長と坂井新館長のインタビューを掲載しました。おふたりのお話からは、博物館や文化財を未来に残していくためには市民の理解が必要不可欠であるということを確認させられました。今後は、坂井新館長のもと、伊東前館長にもご協力いただきながら、市民の方々とともに様々な事業を展開していきたいと思ひます。また、各区の資料館・博物館や教育現場などとも積極的に連携していきたいと思ひます。(鈴木)

お問い合わせ・申込みは博物館まで

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp URL: http://www.nchm.jp
【休館日】毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】(4-9月)9:30~18:00/(10-3月)9:30~17:00

2022年度



■これまでのみなとびあでの取り組み

私は、歴代の甘粕館長や小林館長とは違って、ずっとみなとびあの職員として設立からかわってきました。そのため館長となっても、館長の立場というのに慣れず、館員の皆さんにはご迷惑をかけました。元来、人見知りの引っ込み思案の内弁慶なので、行政や他館、地域、マスコミなどの付き合いがうまくできず、周りの皆さんに助けられて、なんとかここまで来ました。

開港一五〇年という節目があり、みなとびあも様々な事業をしました。館だけでなく、公民館や市民サークル、業界団体、行政、同窓会などで、港に関する講演会や催しなどを開いてくださ



伊東祐之（いとう すけゆき）
長野県生まれ、新潟市で育つ。
新潟大学卒、東北大学大学院修了。新潟県史・市史の編纂、新潟市歴史博物館の設立・運営に関わり、2018年より館長を務める。

いました。そうした際に館を代表してお話をする機会が非常に多くありました。これは私の性格からしてなかなかのストレスでしたが、みなとびあの広報として、湊町新潟の歴史を市民の共通認識とする活動として、歴史を通して考えることの楽しさを知っていたく機会として重要だと思ひ、恥ずかしながらマイクの前に立たせていただきました。

また、企画展や資料収集、調査などに職員気分のまま関与してしまいましたが、やはり資料にしっかり向き合うことが大切だと再認識する機会が多々ありました。

■新潟市の歴史の面白さ

歴史は、その舞台となる地域の地理的環境や既成の社会経済関係などに規定されながら、そこで必死に生き出ている人々が創り出すものです。湊町である新潟町は、常に前向きで

古さに価値を認めません。町の主立ちは次々に交代します。新しい人やモノや情報を受け入れて更新してきた町です。また、周囲の村々も遠隔地からやってきた人々が自分達の手で開いた村です。度重なる災害から拠点となる村を守りながらも、新潟町へ人材を供給し、さらに村から北海道や東北、関東へ新天地を求める人々を送り出してきました。そうした進取の気性を持つていたと思います。伝統や歴史などにこだわらず、今、そして未来に価値を求める人々が創ってきた歴史だと思ひます。それが格式や伝統にこだわらぬ城下町や保守的閉鎖的な中世以来のムラ社会とは異なる、新潟市の歴史の面白さだと思ひています。

■みなとびあへの期待

消極的にも聞こえるかもしれませんが、市民が「みなとびあが無くなつては困る、私たちにどうしても必要なのだ」といつてくれる博物館になることです。東日本大震災の際に被災地の博物館で起きたことや、最近の国や自治体で行っている文化政策や文化財保護の変化から、色々考えることがあ

ります。博物館は今、誰の、何を求める声に応えたいのだろうか。行政からは効率や集客を求める声が高まっています。それに失敗すれば閉館されたり、資料が廃棄されたりする可能性だってあります。万一そうしたことが起こったとき、市民が自分たちのアイデンティティに関わる施設として閉館反対の運動を起こしてくれるような博物館でなくてはならないと思ひています。

そのためには新潟という地域に関する資料を収集、保存、調査して、資料に新たな価値を見出し、地域の歴史像を明らかにする地道な仕事が必要だとして不可欠です。そして、大切なことは、その仕事を学芸員やみなとびあだけの仕事にせず、市民とともに行うことです。その資料や見出した価値、歴史像を市民と共有することです。

さらに、この考え方に基づいて企画展やセミナーなどの既存の形だけでなく、館外へ出て地域づくりに関わることや、学校現場で未来の学芸員を生み出すことや、イベントを市民とともに開催することなどを進めてほしいと思ひます。

■新潟のイメージ

生まれが沼垂なので高校まで新潟で過ごしていました。今では私は考古学をやっていますが、当時は新潟というと明治以降の歴史のイメージが強くありました。新潟に就職するまで新潟の考古学を全く知らなかったのですが、新潟にも古い歴史や遺跡があると知った時は、大変驚きました。

また、新潟県の職員として弥生から古代の遺跡の調査をしていた際、新潟と西日本の遺跡・遺物に共通点が見られたことには感動しました。それまで、西日本の方とは文化的にもまったく縁がないと思っていましたので。その時、新潟の遺跡・遺物の特徴は関東より関西に近いのではない、日本

海を通じた歴史の中に新潟もあったんだなあと実感しました。特に、淳足柵として「日本書記」に書かれた越後に律令体制が成立した時期と一致するように、遺跡・遺物にも変化がみられたことから、新潟の遺跡を持つポテンシャルの高さを感じました。

■これまでの研究、仕事

調査してきた遺跡は、古いもので縄文時代中後期、新しいものは中世（十六世紀）と幅広いです。私自身、専門は古代史とも考古学とも言えず、地域史が専門だと思ひています。

坂井秀弥（さかい ひでや）
新潟市生まれ。
関西大学大学院修了、学術博士。
新潟県教育委員会、文化庁、奈良大学文化財学教授を経て、2022年より館長を務める。

私は、修学旅行で奈良に行った際、一三〇〇年の歴史に直に触れたことをきっかけに、古代のことを勉強したいと思ひ、関西の大学へ進学しま

した。その後、新潟県教育委員会、文化庁政課で十三年勤務した後、文化庁で十六年勤務しました。ここでは、埋蔵文化財の全国の諸問題を国として検討することや全国各地の遺跡保存が仕事でした。新潟で調査してきた遺跡と全国の遺跡を比較検討できたことはとても大きな経験でした。ただ一つ心残りなのは、裏山遺跡（上越市）のことです。弥生時代の高地性集落遺跡で、市民の方々から保存を要請する声が上がったものの、保存には至りませんでした。それまでは、学術的な評価だけで遺跡の保存を考えていましたが、これを機に、文化財に心を寄せる人がいて初めて文化財として生きること気づかされました。

その後、奈良大学の文化財学専攻で、学生たちに考古学や文化財について教えました。この学専攻は発掘調査を担当する専門職員を養成するための学専攻としてつくられたということもあり、特に行政と連携した人材育成に力を入れていました。

■館長としての抱負

私は長く文化庁行政の世界にいたわけですが、最近感じるのは多くの文化財が日の目を見ていないということです。特に、新潟市の歴史では近世以降の歴史がすごく重要だと思ひます。私自身も歴史を形づくる様々な文化財の分野に関心を持ちながら、公開をしていきたいと思ひます。

また、文化財センターや各区の博物館・資料館と連携しあいながら事業を進めていけたらと思ひています。奈良大学博物館で七、八年館長をやっていました。その際も自治体や博物館、卒業生とのネットワークができた良いなと思ひてやっていました。新潟市は合併して、それぞれの館や区が独立してやっている部分が多いと思ひます。区で協力しながら文化財を共有し保護していくことができればいいと思ひています。

全国的にみても、新潟は近世の湊町としては規模が大きく、歴史的価値も高いので、市民のみなさんにその歴史を理解してもらい、愛着を持ってもらえたらと思ひます。



今年度より伊東祐之前館長に代わり、坂井秀弥新館長が就任しました。ふたりが語る新潟への思い、目指すみなとびあの姿とは――。

坂井秀弥

(会期) 前期 四月十六日～五月九日
後期 五月十日～二十九日

田嶋 悠佑

日本史を時代で区切る時、「中世」という区切り方を用いることがあります。一般的には平安時代末から戦国時代までを指します。

新潟県では上杉謙信など武士たちが華々しく活躍した時代として知られ、多くの人々の関心をひきつけています。新潟市には様々な経緯で、新潟市や新潟県全体に関わる中世の資料が残されています。今回の展示では新潟市にありながら、なかなか市民の目に触れる機会のない中世の史料を、新潟市及び新潟県の中世史をたどりながら展示します。

1 中世のはじまり

新潟市周辺では、平安時代末から城家が一大勢力となり、武士の時代が始まります。市域に関する鎌倉時代から室町時代の文献はほとんど残っていませんが、蒲原神社の畠山重宗夫妻像など興味深い資料も残されています。また、展示では城家に関わるものとして東鑑(吾妻鏡)や坂額御前の浮世絵などを展示します。

2 中世の新潟・沼垂湊

戦国時代、信濃川河口部分に蒲原・沼垂・新潟の三つのみなとがあり、「三ヶ津」と呼ばれていました。三ヶ津周辺は経済の要地で、たびたび合戦の舞台となってきました。特に天正八(一五八〇)年から十五年まで続いた上杉景勝と新発田重家の合戦は有名です。展示では、江戸初期の古絵図や上杉家と新発田家の合戦に関する古文書などを展示します。

3 武将たちの活躍

上杉家は、室町時代から越後を支配していました。十六世紀初め、上杉家重臣の長尾為景が実権を握り、跡を継いだ上杉謙信(長尾景虎)、上杉景勝が大きく活躍しました。展示では、謙信の書状などを展示します。

4 天正十四年、上杉景勝上洛の旅

上杉謙信の後を継いだ上杉景勝は、羽柴(豊臣)秀吉が天下統一を進める状況の中で、秀吉の家臣になることを

選び、臣下の礼を取るために天正十四(一五八六)年に上洛します。新潟市にはこの上洛の様子を記した日記が残されています。展示では、道中訪れたであろう場所の写真やイラストを交えて、この日記の魅力を紹介します。

5 発掘でみえてきた中世

近年、中世を語る上で重要な情報源となっているのが、発掘調査の成果です。発掘では城跡や集落、墓地などが調査され、茶碗や農具など日常生活を伝える資料が多く見つかっています。特に、新潟市は湿地が多い土地で、木製品が良好な状態で残っています。展示では、南区の馬場屋敷遺跡や浦廻遺跡の資料などから中世の農業や葬送の様子などを明らかにします。

6 中世の終わり

慶長三(一五九八)年、上杉景勝は豊臣秀吉から会津へ国替えされ、鎌倉時代以来根付いた武士なども越後を去ります。上杉家が去った後、新たに堀家や松

平家が越後の大名となります。実は、国替後も越後へ上杉家を戻すことが検討されたことがあったようですが、結局実現しませんでした。上杉家をはじめとした中世の人々の活躍は、新潟の人々にとって遠い昔の話となりました。

江戸時代には中世の出来事は身近なものではなくなりましたが、坂額御前や上杉謙信の活躍などが古文書や出版物、歌舞伎などの芸能を通じ、形を変えて語り継がれていきました。展示では、上杉家の後に越後を収めた堀家の史料や、上杉謙信の浮世絵などを紹介しています。

今回の展示史料は古い時代のもので多いため、展示期間を前後期に分けています。前期は「川中嶋激戦之図」(新潟県立図書館蔵)など、後期は「上杉謙信書状」(新潟県立図書館蔵)などそれぞれ見ごたえのある史料を展示する予定です。リピーター割引も実施していますので、ぜひご覧ください。

※例えば(元和二年)七月十一日伊達政宗書状(「藤堂文書」、東京大学史料編纂所編「大日本史料」第二二編之五、一九二五年)。

(たじま ゆうすけ 学芸員)

害を防ぐための遊水場として開発が禁じられた場所と伝えられていました。のちに開発が奨励されて、多賀卯八郎(政峰)が私財を投じて開墾した土地は、宝暦元(1751)年の検地で「卯八郎請」と定められ、村となりました。その庄屋を代々務めた多賀家の当主として、春塘は村のために尽力したのです。

南画のルーツである中国の文人画は、儒教の倫理思想をもつ官僚などの知識人がその教養として描くものでした。春塘の画はまさにこの文人画といえるもので、地域を支える立場で身につけた教養の表れとみることができます。

中村 里那(なかむら さとな 学芸員)



歴史さんぽ
多賀春塘の墓碑

西蒲区桑山 慶應寺境内

多賀春塘は、弘化2(1845)年に越後の諸家を紹介した『越後人物志』に、山水画に長じた人物として掲載されています。現存作品は多くないものの、南画(中国の文人画のうちとくに南宗画にならい、おもに水墨で湿潤な自然景を描いた画)の描法を忠実に用いた真面目な山水画で、その人柄が窺われます。

春塘の墓碑が西蒲区桑山の慶應寺にあります。山門を通過してすぐ左手に見え、篆書で「春塘翁墓」、碑陰(裏面)には春塘の功績を称える碑文が刻まれています。それによれば、春塘の名は直温、本姓は幸田氏で、西蒲原郡鴻巣村(現燕市)の生まれ。曾根村(現西蒲区)の多賀家へ養子に入り、「卯八郎請」の里正(庄屋)を継いで「卯八郎」を襲名し、50年務めました。勤勉で情け深く、人々を慈しむ人物だったとのこと。水害に苦しむ村民のために水路を掘り、隣村との争いを取め、ほか困窮した人々に私財を施す行いは一度でなかったといえます。この碑は、春塘が明治12(1879)年に80歳で没した8年後に、同郷の国学者新保西水(1832～93)が撰文したものです。

多賀家の当主は、代々卯八郎を襲名しました。その名を冠する現在の「卯八郎受」は、曾根から新川(もと早通川)を挟んで東側に位置する土地です。卯八郎受を含む早通川右岸一帯はかつて御封印野とよばれ、鎧潟・田潟・大潟周辺の低湿地において水

おすすめの1冊

「築地ホテル館」物語

瓦屋根になまこ壁、棟の中央に塔屋を乗せた旧新潟税関庁舎は、明治維新の波をうけて現れた新潟の文明開化を象徴する建物です。西洋建築技術が普及していない当時、新潟町の大工・円六が見よう見まねでつくった西洋建築で、擬洋風建築と呼ばれています。

そつした手法を円六はどこで学んだのかはわかりませんが、先駆者はいました。清水建設株式会社の前身・清水組二代目の清水喜助で、本書の主人公です。江戸に外国人が満足するホテルをつくるよう欧米からの要求を受け、彼はアメリカ人技師のリチャード・プリジエンスの基本設計のもと、築地ホテル館の実設計・施工を行いました。この建物が旧新潟税関庁舎と共通する瓦屋根になまこ壁、棟の中央に塔屋をのせた姿をしています。慶応四年に竣工しますが、機能したのはわずか4年の期間で、明治五年には焼失してしまいました。

本書では築地ホテル館をめぐる、喜助の人物像や維新の社会情勢も描いています。旧新潟税関庁舎が擬洋風の意匠をまとうつてくられた時代背景を考えるヒントになります。(小林 隆幸 副館長)



永宮和 著
令和3(2021)年11月
原書房 発行

企画展 大河津分水・関屋分水と新潟市

(会期 二〇二三年七月十七日～八月二十八日)

森 行人

今年、大河津分水は通水一〇〇周年、関屋分水は通水五〇周年を迎えます。両分水は、日本海へ信濃川を分流させて下流域の洪水を防ぎ、本市の治水に大きな役割を果たしています。両分水の周年記念にあたり、その開削の経緯を振り返り、両分水が必要とされた背景を紹介します。

大河津分水は燕市と長岡市の境に位置します。開削以前の信濃川では洪水が絶えず、大河津付近で信濃川を分流させて水害をなくす計画が江戸時代から何度も立てられましたが、実現はしませんでした。

明治二(一八六九)年、前年の大水害により分水開削を求める声が高まり、大河津分水工事が越後府により着工されます。一度は中止となりますが、分水を切望する人々や藩、府県関係者の運動により、明治三年工事が再開されます。工事費や人足を出す負担が大きかったため、反対する村々や工事自体の難航もありました。

さらに、最新の知見に基づく外国人技師の調査が行われ、大河津分水が下流の用水取水に支障をもたらすこと、信濃川の舟運や新潟港の機能低下を招くことが指摘されます。調査報告を受けた政府は、明治八(一八七五)年、大河津分水工事を中止します。

大河津分水に代わる治水対策として、信濃川の川筋を整備して流れを円滑にする国の河身改修工事と、堤防を修築して洪水を防ぐ県の堤防改築工事が進められます。しかし、工事は難航し、頻発する洪水により新堤防も破壊したため、大河津分水工事再開を求める声が高まります。

明治三十(一八八七)年から大河津分水工事の測量調査が行われ、明治四十年に国の直轄事業として実施されることとなりました。この事業では大河津分水工事と併せて浚渫を含む河口の改修工事も計画されました。信濃川の治水を実現する見通しになったことで、新潟港の築港も可能になったのです。

大河津分水工事は明治四十二(一九〇七)年に着手され、大量の掘削・浚渫を可能とする大型機械や鉄筋コンクリート製の大構造物の建設等、江戸時代や明治初期にはなかった土木技術が導入されました。大河津分水工事は膨大な労働力と約二三四万円の巨費を投じて進められ、大正十一(一九二二)年に通水しました。

本市中央区と西区の境界に位置する関屋分水もまた、江戸時代から何度も開削が求められてきました。明治初めには水害に苦しむ亀田郷の人々が掘削

を開削しようとした。明治末には実際に掘削を通水させますが、すぐに埋まってしまいました。

現在の関屋分水の計画が動き出すのは戦後のことです。新潟港の改良のため、流入する土砂への対策として新潟県が計画した案の一つが関屋分水でした。当初の計画は関屋分水開削後、下流萬代橋までの信濃川流路の大半を埋め立て、埋立地の売却を財源に充てるというものでした。昭和三十九年、県は関屋分水路事業の認可を受けて準備を進めますが、同年六月に発生した新潟地震により中止を余儀なくされます。

しかし、信濃川水系の一級河川指定を受け、関屋分水事業は国の直轄事業となり、信濃川の治水を目的として実施されることとなります。大河津分水下流水系の整備が進んだことで、信濃川へ流れ込む水量が増え、新潟地震による河床の隆起もあり、洪水の危険性が増していったためです。

昭和四十二年、海への出口となる新潟大堰が着工し、分水路を掘りこむ工事や分水をまたぐ橋梁等の工事が進められます。昭和四十七(一九七二)年には日本海へ通水し、昭和五十年に信濃川水門とこれに接続する締切堤が完成しました。その後、下流域では洪水に備えて堤防敷を広げ、後にやすらぎ堤

として整備されます。

二つの分水開削の経緯は、新潟港や中心市街地の機能や発展にも深く関わっています。通水周年記念の今年、分水をテーマとする企画展を、当館と燕市分水良寛史料館、燕市長善館史料館、長岡市立科学博物館、信濃川大河津資料館、新潟県立歴史博物館の六館が連携して開催します。各館がテーマを設けてリレーのように開催します。リレー展を巡り、地域と分水の歩みを振り返ってみませんか。

(もり ゆきひと 学芸員)



通水後の大河津分水(自在堰)

萬代橋と新潟市

新潟に來られたお客さんと打ち合わせをするとき、萬代橋を望む河畔のホテルをよく利用します。ゆったりと流れる信濃川にかかる橋は、リズムカルなアーチの姿がじつに優美です。その風景はいつからか私にとつて故郷新潟を象徴するものとなりました。

萬代橋は一世紀前の昭和四(一九二九)年に竣工しました。市街地を通る国道であり交通量も多い橋ですが、東京の日本橋と並び国の重要文化財(建造物)に指定されています。橋梁デザイン史上価値が高いとされますが、近代化の途上にあつた新潟で、橋に込めた当時の熱い思いを感じます。

この橋は三代目であり、初代は明治十九(一八八六)年の完成です。木橋でしたが、当時の川幅は広く長さはいまの二五倍、八〇〇メートル近くありました。橋をかけるために八木朋直が私財を投じたことと小学校で習いました。「私たちの郷土新潟市」という副読本だっ

たと思います。萬代橋で結ばれた新潟と沼垂の町はもともと歴史を異にし、明治には新潟市と沼垂町に分かれていました。しかし、萬代橋の開

通から三〇年近くたった大正三(一九一四)年、曲折をへて合併しました。橋が兩岸を結び、東詰に新潟駅が開業するなど、新たな地域社会ができていったからだと思います。以後、新潟市は昭和三十年代までに周辺町村とたびたび合併し、平成十七年、大合併して現在に至ります。新潟市のシンボルとして親しまれている萬代橋ですが、歴史的には、拡大・発展してきた新潟市の起点といえるかもしれません。

今年は大河津分水通水百年を迎え、みなとびあでも企画展を開催します。大河津分水は低湿地が広がる越後平野の環境を劇的に変えました。信濃川の水位は低下し、萬代橋東詰一帯が埋め立てされることになり、橋は短くなり工事も短縮されました。埋立地には万代シティや河畔のやすらぎ堤が誕生し、萬代橋を望むウォーターフロントとなりました。考古学を専門とする私ですが、いまに至る郷土新潟市の歴史を考えることに興味は尽きません。

収蔵資料紹介

「新潟築港記念博覧会写真帖」

沼垂の竜が島に新潟市民悲願の近代的な港湾が建設されたのは、大正十五(一九二五)年です。

大正三年、沼垂との合併により、信濃川右岸側の港湾建設が可能になりました。新潟市の一部になりました。また、大河津分水の建設が決まり、分水完成のあかつきには信濃川下流域の水量を一定に保つことができるようになるため、信濃川河口に港湾の建設計画が進展しました。

大正十五年三月、新潟港の第一期工事が完成し、新潟港を起点とする貿易の期待が高まる中、新潟築港記念博覧会が同年六月十一日から七月二十日まで四十日間の会期で開催され、十八万人を超える来場者を記録しました。本資料はこの博覧会の記録集です。資料内で、新潟港は「北海道、樺太、露領沿海州、朝鮮の各港との主要航路の中心点をなし、陸上では背後に農産、鉱産の宝庫たる越後大平野を控え、更に北陸奥羽一帯の地を背景とし、



北陸、信越、磐越西線、羽越、越後の諸線、鉄路縦横に貫通し、天産地利経済的にも国際的にも枢要の地位を占むべき貿易港」とあります。加えて、博覧会開催の主旨は「港の更生を記念するため、且つ海事、交通、内外物産に対する貿易上の知識を普及徹底せんがため」であると述べられています。博覧会は白山公園一帯で開催されました。第一会場の物産陳列所には三府十九県から出品されたさまざまな物品や、省庁や造船所などから出品された港湾や貿易にまつわる資料や模型が展示され、第二会場の白山新公園には、演芸館や海底館など娯楽のパビリオンが設けられました。これらの様子が写真から伝わりました。また、日替わりで開催された演芸館の演目に集う人々、潜望鏡に興味津々の人々、サークリングという新潟初のアトラクションに並んで座る子どもたちの写真が掲載されています。更に巻末の開催報告からは福引会や、仮装した係員を見つけたら景品がもらえるイベントが開催されたことが分かります。本資料からは博覧会開催の意義とともに、当時の人々の博覧会の楽しみ方、楽しませ方が伝わってきます。

(藍野 かおり 学芸員)